

| | |
|---------------|---|
| Title | 「ビルマ人のNat信仰について」 |
| Author(s) | 服部, 正一 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 14 p.11-p.38 |
| Issue Date | 1963-12-20 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80225 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ビルマ人のNat信仰について」

服 部 正 一

Nat : Ko : kue Gyin : Akyaung

HATTORI Masaichi

နိဒါန်း

န မေဝတဿ ဘဂဝတေဝ အရဟတေဝ သမ္မာသမ္ဗုဒ္ဓဿ။

ဤစာစောင်၌ ဖေဖ်ပြုလိုသည်မှာ ယနေ့တိုင်မြန်မာပြည်တွင်း ၌မြင်တွေ့ရသော နတ်ကိုး ကွယ်မှုနှင့်ပတ်သက်၍ မဂ္ဂင်း မလင်း ဖြစ်လာအကြောင်း အရပ်များ ကိုအဘက်ဘက်မှ စမ်း စစ်ထုတ်၍ ၎င်း မူကား ဗုဒ္ဓဘာသာသမာဓိတိုး တက်ထွန်ကား ခြင်း ကိုအဘယ်မျှ ယုံချက်ပိတ်ပင်တား ဆီး ခဲ့ကြောင်း ၊ ၎င်း နှင့်ပတ်သက်၍ မိစ္ဆာဒိဋ္ဌိတို့ကို သော်လည်း ကောင်း ဥပါဒိန်တို့ကို သော်လည်း ကောင်း အစဉ်အတိုင်း ကျင့်သုံး ခဲ့ပါမှု မြန်မာယဉ်း ကျေး မူ၏ တိုးတက်ခြင်း ကိုကား မဖြစ်စေနိုင်ကြောင်း ၊ နတ်ကိုး ကွယ်ခြင်းအကြောင်း ကိုမြန်မာစာ ပေကျမ်း ဂန်နှင့် သော်လည်း ကောင်း ရာဇဝင်နှင့် သော်လည်း ကောင်း ရှေး ဟောင်း ဥဒါန်း နှင့် သော်လည်း ကောင်း သာဓကပြု၍ ဖေဖ်ပြုရန်ဖြစ်ပါသည်။

ဖေဖ်ပြုသတ်မှတ်ခဲ့သော အကြောင်း အရပ်များ တွင်ကွန်ဝ်ကိုယ်တိုင်မြန်မာပြည်တွင်း ၌တွေ့မြင်ခဲ့သော အကြောင်း အရပ်များ ကိုလည်း ထဲသွင်း ရေးသား ပါသည်။ နောက်ပိုင်း တွင်ပြထား သည့်အတိုင်း အကား စာအုပ်များ ဖြိုငြန်း ရည်ရွယ်ချက် ဖြစ်သော လူမျိုး များ သာမက ပတ်လည်လူမျိုး များ ၏နတ်ကိုး ကွယ်မှုအကြောင်း များ ကိုလည်း ဆက်စပ်၍ ဖေဖ်ပြုအပ်ပါသည်။ ၎င်း တို့၏ကျင့်ထုံး သောနတ်ပွဲများ သည်ကား ယခုခေတ်ဂျပန်များ အတွက်လည်း စိတ်ကူး ရန် မှာခက်ခဲသော အကြောင်း တပါး ဖြစ်မည်ဟုယူဆမိပါသည်။

序

この論文はビルマの怪奇な一面を点描して、ビルマの仏教文化が、仏教伝来以前より存在し、今尚残存している Nat 崇拝によって如何に阻害されてきたか。従前より行われてきた Nat に関する邪教や迷信を取除かない限り、ビルマの文化的発達是不可能であろうことを指摘し、Nat 信仰に関する種々相を歴史・文学・口碑伝承等によって例証し、ビルマ民族性を考察するものである。述べられている事柄には私が実際にビルマにおいて見聞したことが多少含まれている。また巻末の文献を参考として、ビルマ人を取囲む種々な民族の Nat 信仰にもふれている。これら雑多な小民族の行う Nat の祭典はおよそ現在の日本においては想像することも困難であろう。

世紀前 200 年頃、Irrawaddy 及び Salween 両河の河口に Pegu と Thaton の王国が存在していた。謂わゆる金地国 Suvanna Bhumi として知られていた下ビルマに仏教が伝えられたのは Pataliputra における第3回仏教会議が Asoka 王によって開催された直後であった。しかし上ビルマにおいては A.D. 1020 年に Anawyahta 王によって仏教が国家的宗教として樹立された。セーロンと共にビルマはほど純粋な仏教を保存している国は世界どの国にも恐らくないであろう。Mandalay に見られる多数の壮麗な寺院は真に世界最上の仏教学園であり、最も豊富な仏教図書を蔵している。ビルマの僧院長はその国にとっては英国のカンタベリー僧正にも匹敵するものである。

同時に我々は非常に不思議な一見信することができないような現象を見る。それは *geniolatry* 即ち精霊崇拝がビルマにおいてはどの国よりも人々の間に強く根ざしていることである。精霊崇拝は仏教伝来以前よりすでにビルマに存在しビルマ人の古い信仰として残ってきたものである。事実、ビルマ人と接している Chin, Kachin, Karen 等の諸民族は自然の中に存在する精霊の原始的信仰以外に他の宗教をもっていない。そして精霊の力が彼らより、より文化化された隣民族の間に残存しているこの不思議な信仰の中にはっきり感ぜられる。

ビルマでは精霊は Nat という名で呼ばれている。Nat という語がサンスクリット語の Nātha (=Lord, master, protector) から出たものであるか否かは解決されていないが、

Mason, Judson, Sir Arthur Phayre, Bigandet 僧正等のビルマ語学者によってそれは二つの異なる意味に解釈されている。その一つは Dewa, 即ち梵天界 (Brahma) の住民の意味に用いられる。この住民たちはヒンズー教の神話に現われ、それから仏教大系に移されたのである。第二の意味は全く別であって、それは水、空気、森林、山、家屋等、即ち生物無生物を問わず、すべての自然物の精霊を意味するのである。そして Nat 信仰は必然的に自然崇拜、祖先崇拜、英雄崇拜等と関聯して行った。

昔、国王が地上の生活を終えて最後の息を引きたる時、Nat-pyi-hkyauk-htap (Brahma の6階級) のいつれかにおいて幸福を授かるのである、と信じられていた。“Nat ywa san daw mū di” (王は Nat の国にて生を楽しまれる。) という表現の中では Nat は第一の意味に用いられている。もう一つの例はビルマの正月に行われる水祭りに見出される。

ビルマの新年は Tagū: の月 (日本では4月) に始まる。インドより伝わった伝説によれば、Tagū: の月になると、Nat たちの王である Thagyā:-min: (インドの Indra 神に相当する) が3日間地上に下るというのである。その行事は Thin-gyan (水祭り) と呼ばれて、Pon̄na (バラモン) の占い師が占星術上の観測によって Thagyā:-min: 出現の正確な時刻を決定する。これらのバラモンの占い師は Mandalay, Prome, Rangoon, その他ビルマの重要都市によく見出されるが、一般大衆の轻信性のためによい利益を得ると云われている。さて定められた時刻になると、方々で銃が発砲され、老若を問わず人々は街路に集まり、互いに水をかけ合う。若者たちの中にはふざけて水鉄砲を使用するものもあり、到る所楽しい風景が見られる。チン、カチン、カレン人等はいうまでもなくインド人、中国人、ヨーロッパ人等すべての外国人も陽気に水掛けに参加する。仏教寺院では供物がなされ、仏像が婦人たちによって銀杯に満たされた水できれいに洗われる。この日家々は開け放たれ、通行人のために、果物、お茶、煙草、Kwun:-thī: (ビルマ人はきんまの葉に檳榔子と少量の石灰を包んだものを常習的にかむ) 等が無料サービスされる。3日後、Thagyā:-min: が梵天界へ帰る時刻になると、再び方々で銃が発砲されて、水祭りが終わったことを告げる。

この Thingyan の謂われは Thagyā: min: と Āthī という Nat の数学上の計算に関する論争に帰因するのであって、計算の誤っていた方がその首を失うことになるということに二人は同意し、その結果、Āthī が負けて、首を Dintī, Mahawrakā, Gawrawathena, Kinyā, Mantā, Rekkhitā, Patta という7人の Nat の娘に託した。そして毎年、年の始めにその首が洗われ、次から次へ7名のものに引き継がれることになった、というのである。

それ故、ビルマ暦、即ち Thekka-yat は Thagyā:-min: を意味する。Thekka = Thagyā: + yat <

yāza=min:「王」。yatのtはビルマ語ではzの終子音を示す文字ꨀが使用されている。

但し、碑文によっては種々な綴りが用いられている。例えば、Thekkayet, Thekayat 等があり、パーリー語の碑文では Thekkarita となっている。現在最も多く用いられている Thekkayat の綴りは Kalyānī 碑文の “Thekkayāze” の変形したものである。(Thatpon-Abhidhān, P.675)

Thingyan の語源に関しては Mahāthingyan に Māgadha 語 “Thinkanta” よりビルマ語に入り、“kū:-pyaung: gyin:”「(年を)超える、過ぎ行くこと。」を意味する、と書かれている。

しかし、Nat の第二の意味は一般大衆の想像するものにはるかに近いものであり、一般によく理解されていて、各国でも様々な名称で呼ばれているものである。「東洋の伝説に現われる魔とか仙女とかの類はヒンズー教の Dewa から発生したことは疑いのないところである。」(Shway Yoe: The Burman, his Life and Notions) Devil という観念が語源的には Dewa と関聯しているかも知れないが、Tāwateintha 及び Tussitā, 即ち上級の Nat の住んでいる最も著名な天上界とは何らの関聯性をもたない。

Nat が西洋の fairy の如く Kalē:-kabyā (童謡) などの中にしばしば歌われている。

| | |
|-----------------------------|---------------|
| “Mō: paw hmā kye ta lon:, | (直訳)「空に星一つ, |
| Tein hpon: bā lo la ma thā, | 雲が覆うため月は輝かない, |
| Thā daw hkā thā bā lein, | 輝けば明るくなるだろうに |
| Nat-Dewā thū hpan hsin:, | Nat の造り給うた |
| Hpō:-shwe-la-min:” | お月さま。」 |

ビルマでは(第二の意味に用いられる) Nat の起源がどれほど古いかは不明であるが、A.D.9世紀頃にはすでに可成り盛んであったことがうかがわれる。Pagan より程遠からぬ Petleik 塔の周囲の壁は Pagan 王朝第34代の Pyinbyā: 王が築いたものとされているが、その入口に男女両性の Nat の石像が安置されてある。それは Poppā: 山の姉弟の Nat, 即ち Nga Tin De と Shwe-myet-hna の Nat 像だと云われ、当時すでに一般に尊崇されていたことが判明している。

ビルマ人にとって Nat はちょうどギリシア人に対する Pantheon の神々のようなものである。従って国王の死に用いられる場合の如く第一の意味と、第二の意味のようにビルマでは老若にかかわらず誰にでも一般に理解されて用いられる場合とがある。第一の意味に用いられる Nat に相当するものは中国、タイ、ヴェトナム等にも存在しているらしい。

ビルマ人の村には Nat を拝むために Nat-sin と呼ばれる特別な社が建てられているが、ずっと辺鄙な東北部や Irrawaddy 河口附近に散在せる村落には Nat-sin の設けられていない所もある。時にはそれはほんの檻のような貧弱なものもあれば、またチーク材に彫刻をほどこした屋

根造りで赤く塗られた柱を取付けた宿坊に似たものもあり、または一種の高座のようにできていて、その端の台の上に Nat 像が祀られている。その像は飛び出しそうなぎょろっとした目をしており、頭には先の尖った冠を戴いているといった奇妙な姿を表わしている。この恐ろしい形相を呈した像は最も見にくいアフリカの呪物神の像を思い出させる。

高座の下のある所には絶えず村人によって食物、果実、水などが供えられる。Nat に物を捧げるのは決して贖罪観念によるものではなくして、単に Nat をなだめるためである。従ってこの社の前には血なまぐさい犠牲（いけにえ）は供されない。生き物の血を流すことは仏教の教義によって拒否されているところであるから、たとえ最も原始的な型の精霊崇拜が行われる時でもビルマの民衆にはこの事が徹底的に侵透している。

“Kyā: kyauk lo shingyi: kō:, shingyi: kyā: htek sō:” (Lit. 虎が怖いので Nat に助けを求めたが、Nat の方が虎より恐ろしかった。「板ばさみ」または「前門の虎、後門の狼」の意。) という saga:-bon (諺) の中では Nat という語の代りに Shingyi: という言葉が使われているが、Nat を信じるビルマ人は通例会話の際、Nat という語を口にすることを怖れ、Shingyi: という敬語を用う。河の辺にて漁夫たちの話の中にしばしば Shingyi: という言葉を私は耳にしたことがある。Judsonの辞書にも “Ashingyi:” is the tutelary Nat of fishermen とのっている。Ashin はサンスクリット語の nātha に相当し、ビルマ語では thahkin が ashin と同意語である。タライン族は普く知られている Nat に対して Uyingyi: と呼ぶが、一地方を支配している Shingyi: を Okkaya と呼んでいる。

Nat 信仰がビルマ各地に普及していることは拒めない事実である。高等教育を受けた者から、畠に鋤を扱う人々、密林のことなら詳しく知っているがその他の事は何も知らないジャングル地帯の人々、牛を追ったり、舟の上に細々と生活を営む人々等に至るまで、すべての人々に当てはまるのである。

カチン族の中には Nat-sō: (悪霊)のみを認めている者がある。彼らの部落の入口には地酒を入れた竹筒、食物、犠牲に供した動物の骨、斧、槍、刀、矢などがきちんと揃えて置かれてある。それは Nat が欲しい物は何でも道で見つけ、酔っぱらって争いたい時にはいつでも争いができるように武器を見つけるためである。そして Nat 同志が争えば、彼らは村へ入って来て住民を妨害することがないためである。ひたすらに彼らの機嫌をとって、自らの無事平安を祈るのである。

これに反して、ビルマ人は善霊をも悪霊をも信ずるのである。それは Ko Saung Nat であって、本来の Nat と Leip-pya (蝶) の Nat との観念を混同したものであって、一種の具体化さ

れた良心を表わしている。即ち、各人は良い霊と悪い霊をもっていて、それらは絶えず戦っていて、どちらかが勝利を得れば、その人自身が善人にもなり、悪人にもなるのであると信ずるのである。それはゾロアスターの教義と一致するものであり、東洋における原始的な形体のものとして到る所に見出されるものである。

ビルマでは各人の家にそれぞれ Ein Saung Nat（家を守護する Nat）と呼ばれる Nat が住んでいると信じられている。それを慰めるために、家の柱の頂上には白い木綿の頭巾をかぶせてある。普通 Nat はそこに住んでいるからである。ロシアの小説には、農夫の間で domovoï, 即ち「家霊」がすべての家に存在していることが書かれてある。ビルマの Ein Saung Nat と同じように、もし取扱いが悪ければいたづらをやるし、よくもてなされれば親切にする。ちょうどビルマで Nat-sin の社にばらの花や果実が置かれるのと同じように、ロシアでは domovoï のために少しの菓子と油がストーヴの上に置かれる。

ビルマ人の家の縁側に水を満たした素焼の壺が台の上に置かれてあるのを見かける。この水は Pareit-ye と呼ばれて、星占術師またはその地方の僧院長がある種の祈り、または Gähta（呪文）を唱えてから、tha-pye-pin（Eugenia の木）の葉が侵され、部屋の中や寝台の上、および家中の方々に撒かれる。それは Beloo や Nat-sō: が家に入ってくるのを避けるためである。時には水が惜しげもなく撒かれるので書物や重要な書類までがびしょ濡れにされることがある。この素焼の水壺は Nyaung-ye-Ō: と云って、仏法僧の象徴とされている。Gautama が Sakra（Tha-gyā:-min:）を訪れて、Tāwateintha より帰られた時、人々は彼に Nyaung-ye-Ō: の捧げ物をした。このことを記念して人々是一种の魔除けとしてそれを用いているのである。

占星術師がこの全く異教的な儀式を行うために家に入ってくる時には仏教僧を受入れる時と同じほどうやうやく丁寧にもてなされる。もしこの風習に反対すれば一般ビルマ人との平和や面目を保つことは困難であろう。

Nat に虐げられた人の家では、南側に椰子の実を黄色または赤色の布で覆うて吊す。これは Nat に捧げるためである。雨季の初めになると、その椰子の実は新しく包み直される。そして雨季が終ると、改めて糯米、卵、黒砂糖、果実等を供えて、Ein Saung Nat に家族が熱病にかからないように保護を願う。しかし Ein Saung Nat はその住居を提供し、供物をしてくれる人々に対して当然好意を抱いているものだと考えることはできない。Nat は人々が如何に多くの供物をしようとも、恐らく冷然と彼らを見ているだけである。そしてもし何か些細なことで Nat の機嫌が損じられれば、容赦なく家族の者にひどい危害を加えるであろう。またもし気に入らない未知の人が思いがけない時に家に入ってくる時には猛然と彼を襲うて失神させるか、または腹痛を起

させる。

聖なる tha-pye-pin はまたチン族の間では法廷などで証人がその小枝に誓いをなし、木に住む Nat の媒介によって自分の身の上に呪いをかける。彼らは耳たぶにこの木の枝を飾ることさえ怖れるのである。そしてもしうっかりこれをなすと、彼らは Nat-sō: に取りつかれないようにいつまでも Nat をなだめなければならない。

カレン族の Nat 信仰に関する考え方も大たいビルマ人の場合と共通しているけれども、特に男女間のふしだらな関係は Bgha (ビルマ人の Ein Saung Nat に相当する) の最も嫌悪することであり、困難を引き起す原因と見なされている。カレン族の中でも Bwè 種族の間では、それは飢饉の原因と考えられ、それ故、男女関係が発見された時には部落の長老によって厳しく罰せられる。すべてのカレン民族の間に歌われている古い叙事詩に現われる Ywa 神も日常生活に入り込んでいる Nat ほどには重要な役割を果たしていないらしい。

都会に生活しているカレンやカチンの人々の中にはキリスト教徒や仏教徒が見受けられるが、勿論彼らは Nat に頼ろうとはしない。

Tenasserim に住むカレン族は魔術によって体内に押し入れられるもの (ビルマ語ではこれを apin: と云う) のために人が死ぬという信仰をもっている。

Ein Saung Nat の外に村を守護する Ywa Saung Nat がある。タライン族は食事をする前に大鉢を空中に差上げて村の Nat に祈りを捧げる。彼らは let-pan-bin (綿の樹) の下に社を立てて Nat を礼拝する習しがあり、この let-pan-bin でしばしば棺を作る。3年または4年毎に Nat の祭典が催うされ、この時には Nat-gadaw または Nat-win mein: ma と呼ばれる一種の Sorceress が Nat 社へ行進する行列の前で舞踏する。これは病気を防ぐためであるが、万一疫病でも勃発すれば、一層慎重な祭典が行われる。

タライン族が住むある村に恐ろしい伝染病、確か paleip-yawgā (ペスト) が発生したことがある。すると水壺の上に Bilū の姿が荒々しく描かれて、夕方近くになると、その壺がビルマ刀によって打砕かれ、太陽が没してうと、人々は竹の棒をもって家の屋根に登り、柱や屋根を打ち続ける。それと同時に女と子供たちはあらん限りの声でわめき立てる。その住民に尋ねると、それは Nat-sō: をびっくりさせて、退散させるためであると言うのである。このような行事は単に伝染病が流行した時だけでなく、ジャングルの中で蛇に噛まれたり、虎に傷つけられたり、または匪賊に被害を蒙ったり、大木の下じきになった人々より Nat hsō: を追払うためにも行われ、それは taw-htot (ジャングルへ(悪霊を)追払う) と呼ばれる。Forbes 氏によっても次の如く記述されている。"Suddenly about sunset, on a preconcerted signal, the ears of a

stranger would be greeted with a most bewildering and deafening din, caused by every one, man, woman, and child, in every house, beating the house walls, the floors, tin pans, anything to make a horrible noise, which certainly it would take a deaf spirit to withstand”

この taw-htot はラングーンやマンダレーのような大都会においても行われたそうである。

Beloo とは一種の怪物であって、人間の肉を食べ、その結果、超人的な力をもつようになり、目が赤く、突出せる長い犬歯をもつと云われている。仏教伝説に取扱われている Beloo、即ち Yaksha は Arabian Nights に現われる悪魔の地位を占めるものであり、Nibat-taw-zat の中の一つに現われる有名な Ālāwaka も Bilū: sō: または ‘Bilein:’ と呼ばれる Beloo である。

Thū mē: hkōn: go ma hpye so naing thū dō ā: ‘zān ya puggo myā: pe tagā:’ hū ywe Ālāwaka di hkyan: thā pē: lē m shi kyauk zayā yop gyī: myā: go hpan hsin: ywe hkyauk i. Thū ta-hgō: hpyin yathe dō i yin dwin: thō win yauk lyek hadaya wuthtu yop go hsop ne hneip sek ywe seit pyek aung lup i. Yū: aung lup i. Yū: thop le thaw ahkā dwin hma yin hlwā go hkwè gā athè go thū sā: le di. Kywin: dī yop kaung go hkye hnit hkyauṅ: kaing ywe myit tabek yauk aung hmyauk hlwin ywe pit le di.

(彼の質問に答えることができない人々に向かって「これが修験者たちか」と云って、アーラーワカは容赦なく物凄い形相をしておどしつけ、彼の神通力によって修験者たちの体内に入り込み、はらわたを引つかんで彼らを半狂の状態にしてしまった。そして胸板をつき破って内臓を食べてしまい。残った身体の両足をつかんで河の向う側へほうり投げた。)(Thin-hbawa, 1955年7月号)

また女の Beloo、即ち Yakshini はしばしば西洋の物語に出てくる Siren の役を演ずるものであって、Ma-haw-thahda-zat-taw-gyī:-wuthtu)にも、

Ahkyin: dō, ī mein: ma gā: lū mahot Bilū:-ma te:, ī thu-nge go sā: lo ywe hkō: yū di hu hpāyā: laung: so i. Parithat dō le:, ashin thā:-abe jaung thi da nī: hu me: kya lat hlyin ahkyin: dō-ī thā: hkō: ma go thindō shu law, myek taung le: ma hkat, myek htaung le: nī i. Thu-nge hnaik thānā: hkyit hkin hkyin: le: alin: ma shi, hto thō thaw a kyaung: do jaung Bilū: ma hu thi ya da te: so i.

(「皆さん、この女は人間ではありません。ビルーです。この子供を食べたいので盗んで行

ったのです」と菩薩が言われると、群衆たちは「主よ、何故それがお解りですか」と尋ねると「皆さん、盗人女をよくご覧なさい。目ばかり一つせず、目の隅が赤い。子供に対し同情心がみじんもない、それでビルーの女であることが解るのです」と答えた。)と語られている。

さて、Nat 祭の施行によっても病魔の退散する効果が現われない時には修道僧に援助を求める。僧侶はまづ Pareit-gyi: を唱え、それから彼は仏陀が Wethali 地方 (Arakan 又はインド中部という説が多い) に蔓延していた悪疫を駆逐した時の説教をするのが常である。もしこの最後の手段も水泡に帰するならば、村を放棄してジャングルの方へ逃避し、そこで家族毎にしばらくの間、野営生活をしなければならない。Meiktila という町でビルマ人たちが伝染病から逃れるため北方の密林地帯へ移って行くのを私は見たことがあり、その後ビルマ人の知人をジャングルの中にて見舞ったことを憶えている。しかし医学が多少進歩した現在のビルマでは当時(20年前)程の状態ではないと思う。

人が危篤で死に瀕している時に、近くの寺の僧が家族の者に臨終の床へ呼ばれる。しかし僧はその病人の心を慰めたり、善心に立返らせようと努力したりはしない。事実、仏教では地上のいかなる力も人の運命をどうすることもできない。運命というものは全く善悪の行為のバランスとなっている Karma によって、即ちその人の功罪によって律せられたものである。僧侶の如き聖なる人がその場に居合わせるということが周囲の悪霊の力を破壊するに十分であると考えられている。しかし Nat は決して忘れられない。臨終に際して僧侶が “Aneissa, dokkha, anatta” 「(すべては)無常、苦痛、虚無なり。」と Lekkhana-yē:-thon: bā: の祈りを唱える時に病人の親せきや友人たちが裏の出口より静かに去り、花、米、蜜等をもって最寄りの Nat 社へひそかに赴くのである。

チン族の Nat に関して少し述べると、チン族の部落では病気が発生すると、泥人形を造り、豚、銅鑼、壺などを道路に並べて病気の原因であるジャングルの Nat を追い払うのである。また牛の疫病が流行すると近隣の村々では犬を二つにひき裂き、その腸を道にさらして病気の来襲を防ぐ。蛇の交尾を見ることはひじょうに不吉であって、それを見た者は、その夜は村の外で夜を明かし、家に帰ってから鶏を殺すか、または財産が許すならば Nat 祭を催すかをしなければならない。これを怠ったことが村に知れば、村全体に対して弁償をせねばならないのである。チン族はまた虎に対して特別迷信深く、虎を射止めた者は特別の作法によって儀式を催すのであ

る。即ち、虎には不幸がまとわりついていて、その死体を家へ持ち込んだりすれば、祟りで家畜に損害をあたえるからであると云われている。

カチン族は病気になると、“Nat ni shi hpe kāwa ai” (Nat が人を噛んでいる) と云って、早速家族の者は Ningwawt wa (Nat の意志を確める占い師) を呼びに行く。Nat の意志を確める方法は数種あるが、普通に用いられる方法は、shāman という竹、または shāba という草によって占う。病気が重い場合は大い shāman が用いられる。ゆるやかに燃える火の上でそれを乾かす、やがてその節が音を立てて割れると、その割れた両側についている毛状の繊維を綿密に調べて、その病気が何であるかを知るのである。そして Nat への捧げ物として一頭の牛と二匹の豚が要求される。そして Udang という犠牲台を作り、その上で獣を殺す。家の中では村人たちが Nat の祭壇を準備する。それから Dumsa (Nat 祭を司る僧侶) が祈りを捧げてから、Hpunglum (Dumsaを補佐する僧侶) が犠牲獣を祭壇に捧げる。

コレラが流行するか、または家畜に病気起ると、それが村の中へ入り込まないように村人たちは numshang (村の入口) で Nat へ供物を捧げる。

カチン族が最も忌み嫌うのは妊婦が陣痛で死ぬことである。陣痛の時には、Nat が家の中へ入って来ないように chyāga hpun (きいちごの樹) の枝を入口にさしておく。もしこれをしないと、その婦人は非業の最後を遂げるかも知れないからである。そして、もしその婦人が死ねば、その婦人もまた難産のために生れなかった子供も恐ろしい吸血鬼となって Nat-sō: の仲間入りをする。このような Nat-sō: は仲間欲しさに彼らと呼ばびに来るので、また種々な非業の死が惹き起こされると考えられている。難産の妊婦が苦しむのもこの Nat-sō: の所為だと云うので、武器や煙で追い払おうとする。カチン族はまた蛇や、やまあらし、山猫などが道を横切った場合、不吉の前兆と考えて外出を中止する。しかしこれらは横切ってゆかない限り不吉の前兆ではない。

Nat を呼び出して、その意向を訊いたり、病人が全快するかどうかを占ったり、供物の適否を占ったりする仕事は占い師や僧職の者が行うが、ハカチン族では僧侶と占い師は別々に存在しているが、カチン族では Dumsa が二つの職を兼ねている。そして人が死ぬと Dumsa が彼を祖先の故郷へ送ってくれとカチン人は信じている。

ビルマ人の特性の一つは陽気なことである。彼らの宗教観は現実快樂的であり、狂信的信者ぶったところはない。彼らの正統派仏教の慣習的行事も多少花見遊山的な性質を帯びている。断食日 (Ubo-ne<パーリー語 Uposatho, サンスクリット語 Upavasatha) 毎に家族つれだってパゴ

ダへ参詣する。断食日は月に4回あり、即ち新月、白月8日、満月、および黒月8日に当るのであって、この日、仏陀の像を拝した後、宿坊に休息し、お腹いっぱい朝食を食べ、ビルマ葉巻をふかしながら互いに雑談し合う。婦人たちは輝かしい絹の晴衣を着て、頭髪には花を飾る。そして若い男女が求愛し合うのも自由である。このように楽しい半日を過ごして家に帰り、その日は断食するのである。やや静かな祭りに似た感じがする。

このように仏塔に参詣することは一週間に一度思い出すだけであるが、Natを宥めることは毎日の関心事である、というのはNatは絶えず人を破壊させたり、敵意を抱くかも知れないが、仏塔で功德を得るには都合の好い時に行い得ることであるからである。

Hpongyi: (仏教僧) が俗界に勢力を張ろうとする政略的な事や、または他宗教に変節するような事はまづないことである。彼らは僧院の中に静かな生活を送り、その勢力は全く道徳にかなったものである。彼らは古代より伝えられてきた異教的なNat信仰を盲目的偶像崇拜と見なし、その痕跡を取除くことに努めてきたが過去においては成功しなかった、そして今日尚依然として行われている。ビルマ人はHpongyi:を深く敬ってはいるけれども折にふれては、風、火、大地、樹、雷、雲、家、山、河、密林等の諸々のNatを礼拝することは従前通りに行っていくであろう。Mindon王(ビルマ暦1214～1240年、西暦1852年～1878年)は王位に即く以前は僧侶であり、パーリー文学に通じた学者であったが、1876年にNat崇拜に反対して勅令を出し、廃止させようとしたが、成功しなかったことがある。そして、このNat信仰は依然として残存し続け、事実上、仏教と共存する一つの宗教を形成している。

ビルマ人は他の土地へ移住して行く時には必ず出発前に星占いをして貰う。そして荷物を積む牛車の車輪にthabye 樹の枝を付ける。それは彼が通らねばならぬ所に住むNatを慰めるためにするのである。同じようなことが森林の中においても行われる。狩人や旅人が大木の側を通る時、もしその大木にNatが住んでいる場合には、その根元の所に花や米を供える、たとえ、その木にNatが住んでいなくても供物をしてあげば、森林のNatはその者の心をくみとり、道中彼を護ってくれると信ずるのである。森林のNatはHmin-NatまたはTaw Saung Natと呼ばれている。

Upaka-Natは雲に住んでいるが、またジャングルをも徘徊して時には姿を現わすと云われている。子供が母に死に別れると母はジャングルの中でUpakaとなって揺り床を動かしているのが子供に見える、などと伝えられている。

ビルマ人は魂というものについて奇妙な考えもっている。彼らは仏教哲学によって教えられた精神についての抽象的な複雑な組織を理解することが困難なために人間実在の不滅の部分に型

態をあたえ、彼らはそれを Leip-bya 即ち「蝶の霊」と呼ぶ。人が眠っている時、Leip-bya は周囲をさまよい、時には肉体から遠く離れ、目を覚ますと、それは再び帰ってくる。このように Leip-bya がさまよっている間に、途中で出会った種々な善悪のものによって夢が明らかにされる。人が病気になる、彼の Leip-bya は悪霊に呑み込まれるか、または捕えられて、もし医者薬が効目を現わさない時には直ちに Leip-bya kaw(「蝶の霊を呼ぶ」の意)の式が行われる。病人の家族は村の Nat 社に最も美味しい食物を供える。そして Nat に供えた果物や魚、そして蜜等を Nat が食べるように、そしてそれらのご馳走と交換に病人の Leip-bya をもどすようにと長い祈りが捧げられる。もし Nat がその願いを聞入れるならば、病人は助かり、Leip-bya は彼の身体に戻る。もし彼が死ねば、それは Nat が果物や蜜と共に Leip-bya をも呑み込んでしまったのであると信ずる。そしてその家族内に次の病人が生じて同じように Leip-bya kaw の式が行われるまで死人は家族の者に呪われるのである。

眠っている人を突然起こすことは極めて危険であると云われているが、それはさまよっている Leip-bya がその眠っている人の肉体に帰ってくる時間の余裕がない場合には必然的に死が伴うからであると信じられている。このような先入感を破ろうとしてビルマ人を説伏してもほとんど不可能である。

また Leip-bya は子供が生れた時から子供にくっついている Nat の化身であると云われている。それについて Forbes 氏の記録を引用しよう。

“The butterfly may be temporarily separated from the body without death ensuing. Thus when a person is startled by some sudden shock, and is for the moment unconscious, they say the butterfly is startled (Leip-bya lan di). In deep sleep it leaves the body and roams far and wide. A sleeping wife dreams of her absent and distant husband; their two ‘butterfly’ souls have met during their wandering in the land of dreams. If a mother dies leaving a little sucking baby, the two souls are supposed to be so intimately united that the butterfly of the child has followed the departed one of the mother, and, if not recovered, the child also must die. For this purpose a woman who has influence with the nats (not a witch) is called in. She places a mirror near the corpse, and on the face of it a little piece of the finest, fleeci^{est}, cotton down. Holding a cloth in her open hands at the bottom of the mirror, with wild words she entreats the mother not to take with her the ‘butterfly’ of her little one, but to send it back. As the gossamer down on the smooth face of the mirror trembles and falls off into the cloth below, she tenderly receives it, and then places

it with some soothing words on the bosom of the infant. The same ceremony is sometimes observed when one of two young children, brothers or sisters, who have been constant playmates and companions, has died, and, as is thought, attracts the soul of the survivor to follow along the dark path to the land of spirits.”

(Judson's Bur-Eng Dict.

Appendix Note 131, P. 1094)

タライン人やビルマ人でも密林地帯の遼遠の地において行う Nat 祭には魔神崇拝的な性質が遙かに濃厚なものがある。部落の有力者が病気になるたり、伝染病の恐れがある時などには、焚いた米と鶏や家鴨の焼いた肉を村から少し離れた所に設けられてある祭壇の上に積み重ねる。村中の者はみなこの儀式に参加しなければならない。数人の者が選ばれて、怪奇な Bilū: や Tasse に扮する。また犬や豚の動作をして、Nat-sō: に取憑かれた真似をする者もいる。残りの村人たちが出て来て、その中の代弁者が Nat-sō: に扮する者に「家になている病人は回復するのか」とか「Nat は供物に満足したか。」などと尋ねる。この際、誰も本当の名前を呼んではならない。もしうっかりして本当の名前を呼ぼうものなら呼ばれた人は決して返事をしないが、たとえどんなに素知らぬ顔をしていても、非常な危険に身を曝すことになる。Nat-sō: に扮した者は「病人は全快し悪疫はこの地を退散するであろう」と返答する。これを聞くと村中の者は狂喜してジャングルの中に駆け込み、無我夢中で方々を走り廻る。突然藪の中で何かを見つけ、注意深くそれを布で伏せて、息を切らして村に駆け戻る者がある。病人の Leip-bya を捕えたというのである。そしてその布を病人の頭の上で静かに開いて振る。Leip-bya が本来の住家に帰ったつもりなのである。それを確かめるために同じことが数回繰返される。それから皆村人は帰ってくる。この行事には危険が伴いがちである。というのは一時的な身振りのために、永久に Nat に取憑かれることが有り得るし、また Nat-win-mein:ma の近隣に及ぼす呪いは如何なる疫病にも劣らないほど恐ろしいからである。地方でもこのような儀式は全面的に否定されようとしている。またこれに参加した者もそれを口にしない。

かって私は東部シャン州のジャングル地帯にて方角を誤って道に迷い、猛獣、毒蛇、大とかげ、怪鳥等が群棲する間をさまよい、如何なる狂暴な種族でもよいただ一人の人間の姿でも見つけたいと願った、そして何か目に見えない恐ろしい力を感じたことがある。このようなジャングル地帯を背景として生活するビルマ人や彼らの周辺に住む種族たちが怪奇な Nat 信仰をもつことは当然な事のように思われる。

すべての Nat はある特定の地域と直接に関係があり、人里から遠く離れた所に未知の通行人

がうっかり悪戯でもしょうものなら思いがけない災難が身に襲いかかる。ある時、私は数人のビルマ人と一緒に森林を通っていた時、休息しようとして大樹の根元に腰を下ろそうとすると、ビルマ人は私を他の場所に坐ってくれと云って、少し離れた所へつれて行った。尋ねるとあの大樹には Nat が住んでいるから、そこへ坐ることは Ngayè-gyi: dè (直訳：地獄が大きい、即ち、崇る、または罰が当る) というのである。ビルマ人は旅に出る時には、バナナの房か thabye 樹の小枝かを牛車の柱に吊して、うっかり Nat の住居を侵した時の呪除けにする。

ビルマ人の好む娯楽の一つはボート・レースである。絵画的な美しさを楽しむ人は Irrawaddy 河の青い水面上に行われるビルマのボート・レースほど美しい物を夢見ることはできないであろう。競争用ボートには通例その船首に Kalawaik, 即ち Vishnu 神の鳥が彫刻されてあって、そこに thabye 樹の枝が飾られる。そして河に住む Nat を慰めるためにバラの花やバナナを供えるのである。

Nat はある地方では他の地方よりもよく知られていることがあり、時期に応じて特別な Nat 祭が催される。収穫期の前にはビルマ人の農夫たちは規則的に Nat 祭を行う。よい収穫が得られるようにと畠の周囲を行列したり、その地域の Nat に盛大な供物をするのである。

Wa 族の間ではこの種の Nat 祭に首狩りが行われていることが記されている。“The Hill Peoples of Burma” by H.N.C. Stevenson, P.14には Wa 族の Nat 祭に “Head-hunting is still regarded as necessary for their fertility-rites at ploughing time, though this is being strongly discouraged.” と記されている。またビルマ語の雑誌 Shumawa vol 9, No.97 (1955年発行), P.34,35には Nga-nyo 氏によって次の事が書かれている。

「Wa 族の部落においては1年に2回 Nat 祭が催され、人間の首が Nat に供えられる。大ていは稲の刈取り期に当る Wāzo または Wāgaung の月（日本では7, 8月頃）と取入れ期に当る Pyātho の月（1月頃）に行われる。その時期を Nat-htein: (Nat の司祭者) が村人たちに通告する。Nat が Nat-htein: に取りつくとき Nat-htein: は幾人の首が必要であるかを村人たちに命令を下す。そしてその首は首狩りの風習を全然知らない種族の者の首であれば Nat 祭には大いに価値があるとされている。首狩りには3人が選ばれる。その3人は先づ生の魚を塩でこねて、それに唐辛をふりかけて食べ、地酒を飲む。これがすむと、一人が槍を担ぎ、一人が弓矢をもち、もう一人が Ngā:-gyin: (魚名) の尾の模様のついた長さ4フィートの両刀の首切り刀 (Wa 語で Wait-mot-kyaing: という) をとって3人は旅に出る。その後、岩の間または藪の中に身を隠していて道を通る人を見れば不意に毒矢で射て、槍をもった者は槍で胸を突き刺し、刀をもった者は首を切り落とす。刀で首を切り落とす際に唯一打ちにて首を切りとめることは Nat の大して好むところ

ではない。二打ち三打ちできる限り残忍な方法で切り取った人の首を Nat は大そう喜ぶというのである。Wa 族の習慣に従って、Nat-htein: はその首を Nat-sin (Wa 語にて nyap-hka-yop) にのせて、色をつけた御飯、金塊、銀貨、それから首を切り取る際に用いた刀、槍、弓（時には石弓）、および lwe-eit (ビルマ語) と呼ばれる肩にかける携帯用袋等を Nat-sin に供える。Yosaing: と呼ばれる剣舞をしながら村中を歩き廻って Nat-pūzo-patha-pwe (Nat 祭り) を挙行する。その後、地方によっては音楽を奏して、酒食の宴を張る。首を取った者には村中の人々から銀貨を集め、槍一振りと刀一振りつつを褒美としてあたえる。」

Poppā: 山の Nat 兄妹と Shwe-hpin:-gyi:, Shwe-hpin:-nge 兄弟を祀ってある Su-Taung:-pyi-hpayā: の建っている Taung-byon の Nat 祭りはビルマにおける Nat 信仰の問題に大きく取扱われていることは学報 Vol. 12, P.109 に述べたが、彼らは北部ビルマにおいて多大の尊敬を受けている。しかし更に人々から恐れられている Nat は Mandalay と Bhamo との中間にあって、ビルマの旧都の一つであり、現在は一つの村になっているが、Tagaung: という所に、その祠に祀ってある像で、5, 6フィートの高さの柱の上に荒々しく彫刻された首だけの像に過ぎないものである。尖塔形の王冠を頭上に戴き、両眼はとび出して、かっと見開き、ろ馬のような耳と長く曲った鼻をした容貌であって、口がなく、竜の胴体となっている。誰でもできるだけこの祠を避けるが、しかしこの村の人々は何か事をなすに当ってはかならず予めこの方向にお辞儀をするのである。もし住民がこの Nat に花を捧げなかったり、森林に住む人や狩人、漁夫などがその前を通る時に合掌しないで通り過ぎる時にはその Nat は人々に恐ろしい怒りをぶちまける力を持っているとビルマ人は信じている。ビルマの医学書の中に「Tagaung: 疝痛」という項があって、ビルマの医師間では公認された病気であるが、この Nat が立腹すると人々に Tagaung: の腹痛を起させ、強情な者は死に至らしめるという。首の長い水壺、または gurglet をビルマ語にて ye-tagauung: というが、その土地の Nat 像を連想させる。

Shway Yoe 著 “The Burman: His Life and Notions” では「この地の Nat-sō: は同地の*古代王の一人であって、彼は北部インドにて学んだ魔法によってこのような力を得たというのである。そしてその附近に建てられてある3つのパゴダはその名を彼の生涯の挿話からとっている。彼の*二人の息子は Prome 王朝を開いたのである。……」

*古代王の一人とは、ビルマの史実によれば、Tagaung: 王朝最後の王 Thadō: Mahā Yāza で、二人の息子は盲目の双生児として生れた。Mahā Thambwa と Sula Thambwa のことではなかろうか。

なおもう二、三 Nat 問題として取扱われるべき事柄を挙げれば、

Narapatisithu (ビルマ暦536年～573年, A.D.1174年～1211年) は Myim saing: の地より美貌で名高き Weluwati を妻として迎えたが、すでに王位に即いていた彼の兄 Naratheinhka は彼女に心を寄せ、自分のものにせんことを計り、弟を欺いて、ずっと北部の Ngasaunggyan に暴動が起きたので、それを取り鎮めるようにと命じた。そこで弟の Narapatisithu は彼の全軍を引きいて出発した。Naratheinhka はその機会に弟の妻を奪った。Ngasaunggyan に到達した Narapatisithu はその地方に何ら変わったことが起っていないことを知り、自分が謀られていたことを覚った。しかし彼は前以て彼の忠実な下僕であり馬丁である Nga Pyi を Weluwati の見張としてパガンに残し、事件が起きた場合には直ちに知らせるようにと言って白馬を預けておいた。Nga Pyi は早速主君にそのことを知らせるため夜更まで早馬を飛ばせたが、ついに行き仆れたまま途中で眠り込んでしまった。翌朝、彼が目を覚ますと、彼の眠った場所は主君が陣地をしいていた近くであり、また彼の乗ってきた馬の嘶きが主君の Narapatisithu の耳に聞こえていたことを知り、彼は主君に事の仔細を報告したが、Nga Pyi が陣地の間近かにまで来ていながら、このような大事な報告をおくれたことを憤って Narapatisithu は Nga Pyi をその場で処刑した。その後、彼は雄将 Aungzwa 以下手兵80人をパガンに送って彼の兄である Naratheinhka 王を撃たしめ、Weluwati を妃として、兄に代って王位に即いた。後に彼は彼の忠実な下僕であった Nga Pyi を処刑したことを非常に悔い、“Shwe Pyishin Nat” として白馬の像と共に (Umin Han), または “Myin: byū-shin Nat” として (Harvey) 祀ったことはビルマ史上によく知られている。

またもう一つの例は、Taungoo 王朝より身を興し、タライン王国であった Pegu を併合し、アラカンを遠征して、全ビルマの統一を計った(が全ビルマに君臨することはシャン族によって妨げられた) Tabinshwehti: 王(ビルマ暦892年～912年, A.D. 1530～1550年)の時代に、Pegu の国王として Tabinshwehti: 王と戦った Thushintakāyutpi 王は象部隊を編成するため、ジャングルに入り、象狩りをしていた時、部下と離れて唯一人さまよっている内に湖のほとりに出た。そこに突然 Nat-thamī: の姿を見た、じっと見つめていると彼女は再び姿を消した。彼は急ぎ陣地に返って寝たが、その夜、恐怖のため、はげしい熱病にかかり世を去った。

後、Ava 王朝においても、第3代の Tayahpyā: 王が同じように Nat-thamī: の出現によって滅んでいる。(U Hpo: Kyā:)

今でも土地の獵師や漁夫たちは Po Yutpi の Nat として拝しているそうである。

Thushintakāyutpi が森林中にて Nat-thamī: によって変死したのは今より400年以上も前のこ

とであるが私の在緬中にもジャングル地帯でこのような Nat の出現事件についてビルマ人からしばしば聞いたことがあった。もちろんそのような深いジャングルでは悪性熱帯マラリアやデング熱、または Yaung-na と呼ばれる（象皮病の一種で身体中がふくれ上り皮膚が象の皮のように厚くかさかさになってしまい、大抵は数日の中に生命を絶つ恐ろしい）病気等が蔓延している。従ってジャングルの中でマラリアにでもかかれば、途方もない考えや想像が頭に去来するのである。（私もその経験がある） Nat の出現もあるいはそのような現象と関係があるのかも知れない。

今一つは Rangoon の周辺はもとより Pegū にまで畏れられている Mg In Gyi の Nat である。この Nat は水中に住んでいて、人命を奪うことがあると云われている。Wā（3ヶ月間の精進期）のはじまる Wāso の月（日本では7月頃）に、その Nat のために、と云わんよりはむしろその Nat を封じ込めるために特別の祭典が行われる。また上ビルマー体にかけて Mg Min Gyaw という Nat にはたくさんの地酒が供えられる。

また属名をもった Nat には前に述べた Hmin Nat（森林に住む）や Upaka Nat（雲に住む）の外に樹の梢に住む Akakasō:, 樹の幹に住む Shekkasō:, 地面や根に住む Bumasō:, 穀物を守護する Nagyi Nat 等が挙げられる。

処刑された人や非業な最後を遂げた人は Nat となって彼らが死んだ場所に住みつく信じられている。彼らは Nat-sein: と呼ばれて、人々から愛情をかけて貰えなかった人の Nat である。そして Nat-sein: は昔都市を守護するために利用された。即ち城壁の構築に際して、その四隅と門柱の基礎に人柱として建てられたのである。Nat-sein: はその場を離れず外敵に危害を加えるので首都の守りとなってくれる訳である。Nat-sein: は多くの場合、良からぬ生活を送った者、殊に誓いを破った僧侶や尼は死んで Nat-sein: になると信じられている。しかし都城の人柱には王子や王妃が犠牲になって人柱にされた場合があったり、殊に高貴な妊娠中の婦人が外敵を防ぐのに最も強烈な Nat になると信じられていた。人柱になった Nat に関して Pagan 時代の最も有名な例をあげれば、

「マンドレーの近くチャウセ^山の麓にシャン族兄妹の Nat が住みついていると信じられている二つの大きな丸石が見られる。アノーヤター王が命じた Kyauksè の灌漑工事に際し、堰の下に人柱を埋めることが決定された。シャン族の長^{おさ}Myodyi の妹であった Anawyahta 王の妃の一人は彼女の死によって他の人々が救われんことを願った。そして彼女の願いが受け入れられて、堰の Nat となった。また Anawyahta 王の好敵手と考えられていた彼女の兄も王に対し敬意を払うことを要求された。彼はすべてのシャン民族を戦争に巻き込むよりむしろ自分一人が王の命に服

することを決意して故郷を出発した。しかしながらビルマ軍の恥辱を耐えるに忍びず Zawgyi 河に身を投じて溺死した。シャン兄弟は二つの丸石に住みつく Nat となった。そして今日に至るも尚上ビルマ一体にかけて Nat 崇拝の対象となっている。」(D.G.E. Hall, “Burma,” P.17)

またこの Myosade: (人身御供) は寺院の建立に際しても行われていたことが G.E. Harvey の “Outline of Burmese History,” P.32 に記されている。

「目も眩き純白な装いをなし、朝日に輝やく金色の塔、祈りの建築物として最古のものに属し、今日尚参拝者を絶たず、パガンが誇る驚異の一つである Ananda 寺院は Kyanzitta 王の建立によるものであるが、その昔、一人の小児が Myo-sade: として、その基礎に生埋めにされ、その母親が悲しみのあまりもだえ苦しんだ場所を hpayā: kywun (パゴダ奴隷) が今なお語り伝えている。」hpayā: kywun については学報Vol.12,P.110参照。

仏教は Nat 信仰の儀礼を非難するけれども、如何なる大宗教といえどもそれが従来土着信仰にとって代る過度期においては旧来の異端と妥協せざるを得なかったのである。

所によると、人の邪魔もしなければ、また恐ろしい性質ももっていない Nat もいる。昔の Pagan の中心地であったと云われている Nyaung-u のある Nat 社には Ape-Shwe-mynosin という Nat 像の前に、撚れた変な形の石がある。この Nat 社には病人がよく礼拝しに来て、その石を持上げようと試みるのである。もし持上げることができれば、その人の病氣は全快するが、もしそれができなければ、その人は助からないと云われている。また Mandalay 丘の山腹にある小さな礼拝堂には hintha (驚鳥) の像が3ヶあって、その各々にセイロンからもたらされたと云われている仏齒(恐らく模造?)が納められてあり、それと共に1ヶの平たい玉子形の石がある。旅行をしたり、事業を計画する場合等にその吉凶を確めるために訪れる人が多く、もしその石が重ければ不吉な兆候となると云われている。

Nat を信仰する当然の結果として前兆ということを重んずることになる。バラモン聖典に通曉した占星術師は前兆に関する説明の書物 Deiton を常に手にしている。この書物に書かれている例をあげれば、飛んでいる鳥の高さと数、犬の咆え声、蜜蜂の動き、家禽の卵の産み方等によって吉凶を卜するのである。もし牝鶏が布の上に卵を産むと、その飼主は金を失う。旅の初めにきのこを見つけることはこの上ない吉兆である。路上に蛇が横たわっているのに出会わせば旅行や訴訟事件その他のことに遅延する証拠である。もし犬が不潔物を家にくわえて帰ると、飼主は金持になる。土台を掘る時に出てくる物にも吉凶がある。

Pin: ya 王朝（ビルマ暦374年～726年, A.D.1312～1364年）創設に際し, Shwezigon の敷地を掘った時に、骨、木の葉、枝、実等と共に shwe-pan:-pin が発見されたことに由来して、その都を Pan:-ya (ya は ya-gauk の ya「花を得る」の意) と名付け、その後、Pan: ya (ya は ya-pet-let の ya) に変わり、時を経て、Pin: ya と呼ばれるに至った。Shwe-Pan: とは毎年 Shan Sawbwa (シャン州の土侯) よりビルマ国王に献上された花である。この場合にも、占いの結果 Pin: ya は吉祥の地とされたのである。

ビルマ人の信ずるところでは、彼らの生涯の運不運も、一日の幸不幸もみな Nat につながっていて、Nat は片時として忘れることはできない。それほど Nat は彼らの生活を支配しているのである。

Nat が常に恐ろしい形相のものとして表現されているとは限らない。時には Nat-thamī: が美女の表現として用いられる。ちょうど日本人が衣羽の天女を想像する如く、ビルマ文学にも Nat-thamī: を歌った詩がいくつかある。ビルマ文学の黎明期を代表する詩人の一人である Shin Maha Rahtathār の幼少の名を Maung Mauk と云ったが、父の Dhammapāla 大臣に伴われて Ava の宮廷に赴き、王女の*nā:-htwin:-minglā の式に参列した。Mg Mauk は早くより作詩に長じていることが王の耳に入っていたので早速 *yatu (詩の一形式) を即詩するように命ぜられた。その時に誦んだ詩は、

“O bè be, O bè thamī: daw,

Nat thaw pon ma ywin:

O bè be, O bè thamī: daw,

Shwe hlaw thôn: bon hsin:

O bè be, O bè thamī: daw,

Sandaw la hne win:”

(おゝすばらしき、すばらしき姫君、

天女の如く、たぐいなき

おゝすばらしき、すばらしき姫君、

精練せる金にて鑄造せる如き御姿

おゝすばらしき、すばらしき姫君、

月の如く輝ける。)

(註) *ビルマでは少女が12.3才に達すると、その出生月日によって占星術師に黄道吉日を占なって貰い、それが決定すると金針にてna: htwin: (耳に孔をあける) mingalā (儀式) をあげる。そして彼女が

年頃に達したことを公にする。

* yatu < P. ritu.

祭り, 気候, 儀式, 森林, 山, 川, 大地等に関して誦んだ詩。

Nat 信仰に関係ある事実として運勢の占いや命名法が挙げられる。子供が生れると母親は先づバラモンの占星師に運勢を占って貰う。棕櫚の葉に示された運勢に従って人の一生が幸運であるか否かが卜される。それから約1週間後に, kin-bôn-tat の式が行われるのである。kin-bôn-tat について Judson は次の如く説明している。“On the seventh day after the birth of the child, the midwife boils the fruit of the soap acacia (kin-bôn), mixes it with the seven kinds of grewia (ta-yaw), and washes the child’s head; after the head is clean, the midwife takes the child up in a white cloth and presents it to the mother; after this the midwife and the assembled persons who have been invited, invoke a blessing.”

その同じ日に ekkhayā-nan-thin (生れた曜日を示す文字) に従って子供の命名が行われる。ビルマ人の名前は決して自由に付けられているのではなくして, 各人の名前は生れた日に属している文字で始まることになっている。即ちビルマ語の Alphabet が母音群, Ka行, Sa行, Ta行, Pa 行等々に分類され, これが各週日に割当てられているのである。この制限以内ならばどのような名前をつけても差支えない。それ故, Shway Yoe の云う如く, ビルマ人には毎週誕生日が廻ってくることになるが誕生日も度々繰り返されると単調になって, 欧米における birthday のような楽しみはなくなる。

そこで ekkhayā-nan-thin を表で示すと,

Taninganwe-ne (日曜日) A及びその他の母音

Taninla-ne (月曜日) Ka, Kha, Ga, Gha, Nga

Jnga-ne (火曜日) Sa, hsa, za, zha, nya

Boddhahū:-ne (水曜日) Ya (ya-pet-letのya), la, wa, la

Kyathabadē:-ne (木曜日) Pa, hpa, ba, bha, ma

Thaukkyā-ne (金曜日) Tha, ha

Sane-ne (土曜日) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Ta, hta, da, dha, na} \\ \text{Ta, hta, da, dha, na} \end{array} \right\}$

Yāhu (水曜日の正后から真夜中まで) Ya (アラカンではRa)

(ビルマ文字では水曜日の ya とは別即ち, ya-gaukのya)

ビルマ人は姓がなく, 名のみしかもたない。そして男性に対して Maung は25才頃までの若い

人に Mr. の意味で名前の前につけられる。その外に Ko は 30 才前後より 40 才前後の中年の人に、そして U は 40 才頃より年上の人、及び敬称として用いられる。また女性に対しては Ma は未婚、既婚を問わず、若い婦人に、そして Daw は年輩の婦人につけられる。そこで上の表に従って、月曜日に生れた人には、例えば、

Maung Ngwe Khaing (銀の枝君)

Ma Khin (愛子)

Ma Khwe Yō: (犬の骨嬢)

という名前が見出される。「犬の骨」嬢の名前では 2 語の中、Ma を除いた初めの方の名が誕生日を示すのである。

火曜日生れの人には、

U Nyein (静かな人)

Ma Sō: (悪女)

などがあり、水曜日生れの人には、

Maung Lu E (平和な人)

Ma Yon (兔さん)

木曜日生れの人には、

U Hpō: Kyā: (祖父虎)

Ma Hmwe (香のよい人)

Mi Meit (愛情のある人、未婚の婦人に多い)

金曜日生れの人には、

Maung Than (百万君)

Ko Thet She (長寿の人)

Ko Hein (不平家)

Daw Thin (物知り)

土曜日生れの人には、

Maung Dhū Wun (北極星)

Mi Nu (やさしい人、未婚婦人に用いる)

日曜日生れの人には、

Maung On: Myin (高い椰子)

Ma Ein Saung (家政婦)

Yāhu 生れの人には、

Maung Yō: (正直者)

U Yauk (達した人)

等々に命名されている。

ビルマでは、生れた曜日によって、人の性格が左右されるものと一般に信じられている。「月曜日生れの人疑い深い、火曜日は正直、水曜日は立腹しやすいがすぐ機嫌が直る、そして Yāhu の運星の下で生れた者は特にこの性格が甚だしい。木曜日は温和、金曜日はおしゃべり、土曜日は短気、日曜日に生れた者はけちん坊が多い、等と云われている。」(Shway Yoe: The Burman, His Life and Notions)

ところで結局、この命名法にも Nat の influence が感じられる。それは次の事実によっても裏書きされているように思われる。

ビルマ人は概して怠惰であると言われる。外観的にはその考え方は正しいかも知れない。Louis Vossion はビルマ人の怠惰性について、「彼が働くことに反対する時の不幸な日々の中のある一日にそのビルマ人を観察したことによるのではないだろうか。」と考察している。

要するにビルマ人の働くことに反対する、または働く気になれないのは生れながらの怠惰性のためではなく、運勢によって定められたという先入感のためであろう。私が Mandalay にて観察した一例は、10人ほどのビルマ人の労働者の中に特によく働く者を見かけたが、他の者たちは附近でただ彼が働くのを見ているだけである、ある者は笑いながら雑談もしている。私は「何故彼一人が働いて君たちは怠けているのか」と尋ねると、彼らは「Mg. Ba Jan (よく働く人の名前) はよく働くように生れているのだが、私たちはそのようには生れていない。勝手に働かせておきなさい。」と云うのである。また金曜日は怠惰な者にとってよい口実を作る日である、というのはビルマ国中、一般に金曜日は不運な日とされていて、“Thauk-kyā ma thwā: hnin” 「金曜日には(何処へも)行くな。」と諺にまでなっている。

また曜日には関係なく、次の時刻又は場所にて生れた者は生れながらの白痴であると信じられている。

(1)真夜中に生れた者。

(2)太陰月の最後の日に生れた者。

(3)空が雨雲に覆われて真暗になった時に生れた者。

(4)密林にて生れた者。

現在はビルマ本土より全く姿を消して了ったが、パガン王朝第38代 Taung-Thu-Gyi: 王の時代には全盛を極めていた Ari: も Nat 信仰には大いに関係をもっていた。

Ari: の語源はサンスクリット語の Ārya (尊) から来ているか、または Aranyāka (森に住む者) の語が訛ったものか、ともかく語源不明の語である。大乘仏教、特にチベット系の密教僧であったとも思われるが、恐らくヒンズー教の行事を行う僧侶の一階級であっただろう。またはシヴァ教僧の一種であったという説もある。彼らは藍色の法服をまとい、髪を長くし、Nagā を崇拜し、犠牲にした動物の頭を寺院内に吊し、一年に一度、国王を助けてポッパ山の絶頂で Nat へ動物を供えた。

特に国王を始め、王侯貴族庶民の結婚の儀式を行うに当り、花嫁を最初にアリー僧院に送らねばならぬという習慣があった。即ち、アリー僧侶たちは初夜権をもっていた。もしこれを守らない場合には、何人といえども厳罰に処せられた。彼らはまた aggiyat (錬金術), hse: wā: (秘薬), mandan (曼陀羅), hmaw (呪文) 等の修法を行い、拳闘、乗馬なども練習し、絶えず酒食にふけり、色慾をほしきままにしていた。

Anawyahta 王はこれに弾圧を加えてパガンより追放することはできたが、15世紀に建てられた碑文の中には、当時この Ari: がなおミンヂャン地方に残存していたことが記されている。アノヤーター王が小乗仏教の移入を企てたのもパガンの宗教が腐敗状態にあったからではなかろうか。

次にNat に関係するのは Bawrithada である。ビルマでは htō:-gwin: (刺青) をする者は最近減少してきているようであるが、シャン州では地方によっていまだ行われているようである。日本でも昔、やくざ者が刺青をしていたのと同じようにビルマでも以前はかなりの多くの者が日本の場合と同じような意味で刺青をしていたが、ここで問題とするのは神秘的呪文の刺青である。その模様は実に種々様々であって、虎、猫、猿、象、鳥、蜥蜴、虫、bilū:, 行者、及び不可解な言葉等が顔、特に頬が多く、前額、頸、腕、背中、腰、胸、股、臀部等身体中所かまわず、刺青を施すのである。

ビルマ文学史上著名な U Kyin U の作品、Pāpahein-Pya-Zat の主人公 Pāpahein 王子の刺青は代表的なものである。前額には蜘蛛、左頬にはいもり、胸の右乳房の所に瑜伽行者、左乳房の所には Weizzā (「神秘的な力をもった智者」という意味)、胸の真中には猫、左腕には tet-tū (蜥蜴の一種)、両股に孔雀、頸筋に油虫、肩の真中に鶯、腰の上に Bilū:, 両尻には猿、その下の両側に虎、とこれだけの模様の刺青が Pāpahein 王子の身体に施されてある。しかし、シャン族の中には掌と足の裏を除いては身体中隙間なく刺青をしている者もいる。刺青をすることには色々

な意味が含まれている。ある場合は自分の愛する女性を手に入れるための *anu-hsē* に過ぎないこともある。この *love-potion* は朱とある種の薬と *tauktè* の乾皮を砕いたものを混じて作るそうであるが、この *tauktè* というのは蜥蜴の一種で屋根裏や樹の空ろに棲んでいて乾季になれば、けたたましく鳴くのである。そしてこの蜥蜴が屋根裏に巣食うと、その家に幸福をもたらすと言われている。この蜥蜴が鳴くとビルマ人は “*Apyo lā:, ao lā:?*” と *tauktè* に向かって言うが、それは何も「お前は処女か、それとも結婚しているのか？」と尋ねているのではない。恐らくビルマ人の幸福をもたらす動物に対する愛情からではないだろうか。とも角、*tauktè* が幸福をもたらすが故にその乾皮が *anu-hsē* に用いられるのであろうか。この *hsē* (薬) を身体のどこか目のつかない所に刺青師に頼んで少しの丸い斑点を三角形に並べて貰うだけで思う望みが達せられると信じられている。

次には *apyi:-hsē* がある。*apyi:* は「不死身」の意である。*apyi:-hsē* は打たれたり、怪我をしても痛さを感じないためにする刺青であって、*thenat-pyi:* (「武器に対して不死身」の意) も同様、軍人や盗賊がもっているもので、銃の弾丸や刀によって受ける傷に対する護符の役目をする。この *hkaung:-beit-set* (護符: *hkaung:* = 空ろ + *beit* = 閉ぢる + *set* = 武器) は色々な種類のものがあって、金、銀、鉛、または角などに呪文が書かれていて、皮下の肉の中へそれを入れるのである。*Mwe-hsē* は蛇に噛まれるのを防ぐためのものであり、手首、手の甲、脚のこむらに皮下注射をして刺青する。これはジャングル地帯に住むビルマ人やシャン人には大へん多い。同様に *a-kwe-a-kā* (防護薬、または魔除け薬) は魔術師の呪文を無効にして、あらゆる妖気を遠ざけると言われている。

刺青について最も怖しく気味の悪いのは *akyan:-hsē* に関するものである。*akyan:-hsē* (「強烈な薬」の意) の手術のできる刺青師はビルマ本土にはほとんど居ないということである。シャン州に僅かばかり残存しているらしい。この *akyan:-hsē* はその怖ろしい作用のためにその刺青の手術を受けるものは理性を失い、苦しまぎれに夜、墓場をさまよって、死人の肉をあさり探すと云われている。そして *akyan:-hsē* の手術を受けて、人の屍肉を食った者を *Bawrithada* と呼び、超人的な不死身の力をもつようになる。*Bawrithada* というのは、「食人鬼」を意味し、その故事は *Jataka* 物語より由来している。「昔、*Kuru* 国の *Patta-Nagol* 城市に *Kawrabhya* という名の王が支配していた頃、菩薩は *Thutathawma* という名によって王子となり、*Barānadi* (*Benāres*) の *Byahamadat* 王子と共に *Taxila* (現在のパンジャブにありて、往時、有名な大学の地として知られていた) に学び、学終えてそれぞれの国に帰り、やがて二人共王となった。*Byahamadat* 王は料理として魚肉や動物の肉を好み、料理人 *Rathaka* を召し抱えていた。ある

時、一匹の犬が Rathaka の隙を見て王のために料理してあった馳走をくわえて逃げ去った。Rathaka は死罪の危険を感じ、直ちに町を走り廻って動物の肉を探したが見つからず、万策尽きて墓場に赴き、まだ埋めていない死人の肉を切り取り、もって帰って料理し王に差し出した。王はその人肉料理をうっかり食べてしまい、殊の外美味な馳走であったので、調べて見ると、それが人間の肉であったことを知った王は Rathaka を罰するどころか、人肉がこの上もなく気に入る、毎日人肉を料理して差し出すように命じた。Rathaka は王の命令により、獄舎より囚人を引き出して殺し、生々しい人肉を料理して王に差し出していた。ところが次第に囚人の数が減じて、終には全部尽きてしまった。そこで再び王の命令に従い、道に金銭を落して置き、それを拾った通行人に罪をかぶせ、宮廷へ引き連れて罪人として殺した。その方法も度重なると人々が知って金銭を拾わなくなり、不平をもらすようになった。そして Kālahat 将軍に訴えた。Kālahat 将軍は兵士に罪人を捕えるように命じたところ、Rathaka を捕えて来た。将軍は Rathaka より王について一部始終を聞き、直ちに Byahamadat 王に面謁し、王の誤れる行為を改めるよう王に懇願した。しかし人肉を食べることを断念することができず、Byahamadat 王は Rathaka を連れ、宮殿を去って、ジャングルの中へ入った。そして旅人を待ち受けて、自らを Bawrithāda と称した。旅人たちも噂を聞き知って、そのジャングルを迂回して行った。終には人肉が得られなくなったので、料理人 Rathaka を殺し、自らの手でそれを料理した。その Bawrithāda となった Byahamadat 王が自らの人肉の犠牲にせんものと99人の王を捕え、最後に Thutathawma 王である菩薩を捕えたが、菩薩の説法によって Bawrithāda から立直ることができたというのである。」この故事より “Lū-thā:-ma-ya, Rathaka-hkyaing” (「溺れる者は藁をもつかむ」の意。直訳: 人の肉が得られなければ、Rathaka を切る。) という諺が生れた。

ビルマ史上に Bawrithāda の例を求めるならば、Byat-wi-Byatta 兄弟を見出すことができるであろう。二人は回教徒のインド人であったが、航行中彼らの船が難波して、二人はタトンに漂着し、タトン王 Manuha の師匠の元に司えていた。ある日、師と共にジャングルの奥へ薬の根を掘りに出かけ、そこに瑜伽行者の死体を見つけた。師は秘薬・曼陀羅の術に通じた人であって、その行者の屍肉を火に焼いて食べると種々な病気は失くなり、寿命は延び、10日間の旅程も1日にて達することができ、如何なる巨象もその牙をつかんで倒すことができる程の力をもつことができるようになる等のことを二人に話した。しかし、その行者の死体を他の役に立たせようと師は考えて、二人に彼の住家へその死体を運ばせて大切に保存して置いた。行者はジャングルの中でアップンダヤというマンゴの実や eugenia の木の実のみを食べていたので死体の香いは nandabu バナナのようによい香りがしたという。しかしインド人兄弟は師が話した事に好奇心を

感じていたので、師の不在中に行者の死体を焼いて食べてしまった。師匠が家に帰ってきて、二人が行者の死体を食べたことを知った。二人は巨象のような力を揮うようになり、やがてその事がタトン王 Manuha の耳に入り、王は恐怖の余り、兄弟二人を捕える命令を出した。兄の Byat-wi は妻の家にて睡眠中に殺され、弟の Byatta はタトン王を逃れて、バガンに着き、アノーヤター王の部下となった。タトン王は Byat-wi の死体をばらばらに切って、城壁の周囲に埋めさせた。それは Nat-sein: の項にて述べた理由によるのである。

アノーヤター王の配下に入った Byatta は駿足を以て王の命ずる任務を果していた。Poppā: 山よりサガー樹の花をとって来て王に献ずることになっていたが、一日に十回往復したという。Poppā: 山にて彼と Bilu-ma との前世の宿縁によって二人の間にもうけられた二子 Shwe-pyin:-gyi: と Shwe-pyin:-nge を残して、義務怠慢の理由によってアノーヤター王によって処刑されるが、二子の兄弟はアノーヤター王に養われ、二人は成人して王の為に尽した。アノーヤター王の中国遠征及びタトン攻略に際しても、Shwe-pyin: 兄弟の Payoga (Nat による影響力) によってアノーヤター王が彼の軍を有利に導くことができたのである。

このように Bawrithāda に関して、歴史・文学にもいくつかの例が見出されるのである。

従って akyan:-hsē: によって刺青した Bawrithāda は不思議な力をもつようになり、犯罪人になる場合が多く、警察も大いに手こづるそうであるが大ていは眠っている間に射殺されるか、または秀れた行者によって akyan:-hsē: の魔力が消されて本心に立返られることもある。

刺青を施す際には次のような意味の文句が唱えられることが Shway Yoe の「ビルマ民族誌」に記されている。

Anu-hsē: に対しては「Papawadi は我が妃であり、彼女に婚約を申し込んできた 7 ヶ国の王をすべて潰走させた。彼女は mallā の樹の花が馥郁たる芳香を森に放つ時のように美しかった。我は偉大なる Kutha-yāza である」

(註) Kutha yāza は釈迦の事蹟を演出する Pya-zat に現われる一英雄。

APyi: hsē: に対しては「仏塔より黄金を盗んで来て、火の中に入れて精錬せよ。そして家の中で淋しい通路で、幸運の星の下で、仏塔の前で 9 百 9 十 9 回呪文を唱えよ。水を捧げ、飛翔する galôn の輪を描け。さうすれば如何なる危害も汝の身にはふりかからず、無事息災であろう。

(註) galôn または garunda は nagā: (龍) の敵と見なされる架空上の怪鳥。

このような文句は min-kyauṅ-hsayā または hto:-gwin:-hsayā (= tattooer) の書物には種々書かれている。そして呪文には次のようなものがある。

Nat-tha wa-pa wa-pa nat-tha na.

Sa-ba-pa-wa-wa-ba-pa-wa

また魔法として書き込まれる文字は၈, ၉, ၁၀, ၁၁ 等である。

Nat は人間の想像であるかも知れない。Nat にまつわる事件は今なおビルマにおいて起っている。今年の4月4日付の Kye:-Mon Thadin:sa という新聞に報ぜられていた事件によっても明らかである。一人の老婆が知人の葬式に行った帰り途、Nānābhāwa と間違えられて、一人の象使いの若者にビルマ刀にて切りつけられ、その場に息絶えて死んだ老婆殺害事件があったのは Mon-Ywa の西方、Pon-Taung-Pon-Nyā 地域であって、Yaw 族の住む、Nat 信仰の最も盛んな所として人々に知られている。その地方では Nat か Son:, Kawe, Tassè, Bilū: 等種々な名称、即ち Nānābhāwa (妖怪変化の類い) として呼ばれ、超自然的な存在が現実のものと想像されている。

宗教的な祭礼に用いられる特別の儀式、祭文、祈願文、また上述の伝説などは Nat 研究者にとって価値あるものである。これらの記録を丹念に蒐集することは民族学の研究としても興味深い。

Nat 信仰はビルマ人特有のものとは限らない。それは東南アジア諸国に共通せるものであることが Mahā Yāzawin にも記されている。

Nat 信仰は涅槃の境地を求めんとする人を無能力にせしめるものであると僧侶たちは説くが、それは一般大衆には無益である。古い昔より根づいているこの不思議な信仰を特徴づけている粘着性ほど著しい力をもつものはない。Anawyahta王時代における仏教の最盛時、その最も熱烈な仏教復活の時期においてでさえも Nat 信仰は決して根絶されてはいなかった。ただ睡眠状態にあってだけである。ビルマ語では Nat-Kō: kwe-gyin: と言って、Nat-Worship と訳されているが、その言葉の正確な意味においては worship ではないかも知れない。それはインドの神秘説でもなければ、自然不可知力説でもない。それは単に精霊融和である。

ビルマ語の Kō: kwe-gyin: は kō:=trust in, rely on +kwe=to be screened from view, keep out of sight,但しこの場合は殆んど expletive に用いられている +gyin: =抽象名詞を形成する affix.であり、それは純粹の geniolatry である。ビルマ語では ayū (=belief) とは呼ばない。

未開人間の古い信仰は純粹な仏教の影響にも拘わらずビルマに残存し、その昔ビルマ人の祖先がイラワジの谷間へ移動してくる以前の彼らの故郷であるヒマラヤの高原地帯に今日でも見出されるのと同じものである。それは民族学研究者に知られた古い現象であり、東南アジア諸国民、特にビルマ人の間に最も明白に見出されるものである。

参 考 文 献

- Judson's Burmese.-Eng Dict., 1953
- U On: Shwe: That-pan Abhidhan., 1956
- U Aw Bhātha: Ma-haw.-thadha Zat-taw-gyi: Wut-htu, ビルマ暦1316 Nayon月
Thin Bhawa(ビルマ雑誌, 1955年7月号)
- Shumawa(ビルマ雑誌vol9), 1955
- U Thein Han: Pyi-htaung-su- Thamaing Pon pyin myā:, 1957
- U Kyin U: Pāpahein Pya-zat
- Tekkatho Tin Ai : Myanma Sagā: bon Wuthtu ponpyin myā:, 1955
- U Tin Swe: Porana Kahtā Abhidhan, 1954
- U Hpō: Ngwe: Tan: Myin Kabyā Hpwe̎ Ni: Kyan:, 1955
- Hertz: A Practical Handbcok of the Kachin Language, 1954
- Louis Vossion; Nat Worship Among the Burmese, The Riverside Press, 1891
- Shway Yoe: The Burman, His Life and Notions, 1883
- Harry I. Marshall: The Karens of Burma, Longmans, 1945
- H. N.C. Stevenson: The Hill Peoples of Burma, Longmans, 1944